

<講演抄録>4. 日本で市販されているシロップ系総合感冒剤の歯垢内酸産生性(第28回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題)

著者	尹 梅, 阿部 一彦, 山田 正
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	15
号	1
ページ	93-93
発行年	1996-06
URL	http://hdl.handle.net/10097/31545

故で打僕により 1|1 2 を喪失、ブリッジによる補綴処置後、頸肩部のこりと痛みが出現した。現症：顎口腔所見；1. ③② 1|1 2 ③ にブリッジが装着されていた。2. 上顎前歯部舌側、4 5 にレジンの填塞があり咬頭嵌合位が安定しなかった。治療：下顎の後方および左側偏位の是正、咬頭嵌合位の安定が得られるよう装着されていた補綴物を再製作した。全身の緊張除去のため鍼治療を2カ月間、計18回行った。治療後、咬合の改善と頸肩部のこり、痛み消退がみられた。

姿勢の変化：咬合治療前後の姿勢について姿勢分析器を用い数量的に検索した結果、1. 正面；① 治療前の正中線に対する頭頸部の顕著な右側への傾斜に改善がみられた。② 治療前、左肩が高かったが、治療後、左右の肩の高さの差が減少した。③ 治療前、左腸骨稜が高かったが治療後の改善はみられなかった。2. 側面；① 上体の前方への移動がみられた。② 頭部の上方への起きあがりが見られた。3. 水平面；① 治療後、頭部の右方への回転がみられた。② 治療後、左右の肩、腸骨稜を結ぶ線の右方への回転がみられた。

考察：1. 咬合の改善で全身のバランスの回復や不定愁訴の除去が得られる症例があると考えられた。2. 咬合と全身の関係の客観的評価のため、姿勢の変化を表す基準点の設定に関する検討が必要と思われた。3. 不定愁訴の原因に咬合の異常があり、その治療には歯科を中心とした多角的な参加が望まれる。

4. 日本で市販されているシロップ系総合感冒剤の 歯垢内酸産生性

尹 梅, 阿部一彦, 山田 正 (口腔生化)

錠剤などを飲み込むことのできない小児を対象として、シロップ系総合感冒剤が用いられている。今回、日本で市販されているシロップ系総合感冒剤のヒト歯垢における酸産生性を、トランジスター電極を部分床義歯に組み込み、電極内蔵法により検討した。その結果、実験で用いた5種類の薬剤服用後の歯垢の最低pHは4.7~5.2となり、エナメル質が溶け出すと考えられる臨界pH(5.5)よりはるかに低下することが判明した。また、シロップ系感冒剤で服用直後、水道水で洗口しても、歯垢のpH低下があまり影響されないことがわかった。処方によれば、これらの薬剤は1日3~6回さらに就寝前にも服用することが指示されている。以上のことより、現在日本で市販されているシロップ系総合感冒剤はヒト歯垢において酸産生性が高く、齲蝕発

生に関して大きな危険性をもたらすと考えられた。これらの感冒剤には25%~50%のスクロースが含まれており、齲蝕発生の危険性を未然に防ぐためにも、含有されている発酵性の成分を非発酵性または低発酵性の成分に置き換えるべきと考えられる。

5. 口唇裂口蓋裂患者に Tessier Osseous Microtome® で調整した腸骨海綿骨細片を移植した症例

成田憲司, 山口 泰, 大谷真紀, 玉木祐介, 武田 理, 前川理人, 越後成志*, 幸地省子** (国立仙台病院歯科口腔外科, *口腔外科2, **顎口腔機能治療部)

顎裂部腸骨海綿骨移植術後に、良好な歯列形態を得るためには、鼻腔側および患側中切歯裏面の粘膜剥離を十分に行って、可及的に大きな移植床を形成すること、移植床に海綿骨を緊密に充填することが肝要であるが、骨鋭匙で採取したままの大きさの海綿骨を移植した場合、死腔が生じたり、軟組織が入り込んだりして、骨形成が不十分になることが危惧されてきた。今回演者らは、狭い顎裂の症例に骨移植を行う際に、死腔をなくし、同じ大きさの海綿骨を均等な圧力で充填するために、Tessier Osseous Microtome® (以下Microtome) を用いて、採取した海綿骨を均一で微細な海綿骨に調整してから移植した。その結果、下記のこと示唆された。

1. Microtome の使用により、狭い顎裂への緊密な骨の充填が容易だった。

2. 術後、CT および X 線写真上で十分な骨の充填を確認しており、口腔前庭の深さ、顎堤形態などにも、問題は認められなかった。

3. 十分量の自家腸骨海綿骨細片のみを使用しているため、皮質骨を混ぜたり、スポンゼルを使用した場合に比較して、良好な予後が期待できると思われた。

4. Microtome の骨回収率は約60%だった。

6. 重症複合免疫不全症 (SCID) におけるサイトメガロウイルス (CMV) 感染の免疫組織化学的検索 — 唾液腺の病態を中心に

大河原万里子 (歯学部学生), 熊本裕行, 鎌谷宇明, 大家 清 (口腔病理)

CMV は、通常発症することなく潜伏感染が持続されているが、臓器移植や AIDS など免疫低下をきたした宿主では重篤な感染症を発症する。今回、先天的に細胞性・体液性免疫機能を欠損する SCID の1剖